

國學院大學學術情報リポジトリ

大学院協定留学報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石垣, 絵美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001489

大学院協定留学報告書

〔氏 名〕石垣 絵美（文学研究科博士課程後期・文学専攻）

〔留学期間〕出国日：平成 29年 9月 9日 帰国日：平成 30年 7月 22日

〔留 学 先〕中国・天津市・南開大学・外国語学院日本語学科

〔主な活動〕

（1）履修科目

①外国語学院の科目

南開大学の外国語学院日本語学科において、博士課程前期1年～後期4年の学生と共に、前期（平成29年9月25日～平成30年1月8日）に4科目、後期（平成30年2月26日～平成30年6月25日）に3科目、計7科目を履修した。具体的には、東アジア古代学研究（韓立紅教授100分×14コマ）、日本文化專題研究（韓立紅教授100分×14コマ）、東アジア古典文学導論（劉雨珍教授100分×14コマ）、日本古文選読（劉雨珍教授100分×16コマ）、中日典籍翻訳研究（劉雨珍教授100分×16コマ）、東アジア思想文化名著選読（韓立紅教授100分×16コマ）を履修した。

講義の主な内容は、東アジア文化圏における文学の変遷や、日本文化の特性について検討するものであった。また、斎部広成撰・西宮一民校注『古語拾遺』（岩波書店、平成29）を底本として中国語を用いて校異と注釈を付す方法も学んだ。授業形態は、指定されたテキストの分析結果の授業内発表と討論という構成で、学期末に3000～6000字の小論文の提出が義務付けられた。

外国語学院日本語学科では、自身が専攻する民俗学以外の学問領域の講義を履修することで、民俗学以外の専門領域の研究状況や研究方法についての知識を増やすことができた。また、中国語での発表や討論を繰り返し経験し、日常的に中国語を母国語とする学生と会話することで、語学が格段に上達した。さらに、中国の学会における研究発表のルールや、中国語で論文を執筆する際に使用すべき言語も学ぶことができた。

②漢語言文化学院の科目

後期の開始と共に、南開大学の漢語言文化学院のクラス分けテストを受験し、平成30年2月26日～平成30年6月25日に、漢語言文化学院高級2班において、聴解（100分×16コマ）、閲読（100分×16コマ）、語法（100分×16コマ）、スピーキング（100分×16コマ）を受講した。クラスメイトは、ヨーロッパ諸国と韓国・ベトナム・インドネシアなどのアジア圏、その他にアメリカやカメルーンなどから来申し、孔子奨学金を利用して交換留学している学生が大半を占めていた。そのため、クラス全体のレベルが非常に高

く、多くの刺激を受けた。

スピーキングの授業では、パワーポイントを用いた発表や討論を通して、世界各国と中国の経済事情や交通、文化、信仰、哲学について学んだ。聴解の講義では、日常会話より難易度の高いニュースの聞き取りや、共通語以外の地方の言語の聞き取りなどを行った。そのため、共通語を話さない地域で調査をする際に役立った。閲読の講義では、中国の食や中国の哲学、中国人の色彩感覚などをテーマにした本文を読解した。課題として作文が課され、この機会を利用して、論文で使用する定型文の練習をした。漢語言文化学院で履修した講義は、日常で使用する中国語の上達を助けるとともに、調査や中国語での論文執筆に役立った。

(2) ティーチングアシスタントとしての活動

前期・後期を通して、外国語学院日本語学科の王凱先生のティーチングアシスタントとして、講義の代行や学会運営の補助を行った。具体的には、平成29年11月2日～11月6日に開催された、第4回南開大学・國學院大學院生・若手研究者学術フォーラムの運営補助、平成29年11月20日に日本語学科4年生対象の日本語新聞選読（1コマ）の代行、平成29年12月21日に日本語学科2年生対象の日本語聴解対策（2コマ）の代行、平成30年5月12日～5月16日に、國學院大學の渡邊卓先生による講演会の補助を行った。ティーチングアシスタントとして、実際に教員の仕事に携わることで、指導力がつき、貴重な経験となった。

〔報告事項〕

報告者は、平成29年9月25日～平成30年7月15日の南開大学外国語学院日本語学科での留学期間を利用し、天然痘をめぐる民俗伝承について、資料収集と実地調査の両方を行った。日本で学んだ民俗伝承学の方法を中国の事例の分析に用いて、以下のように作業を行った。

(1) 天然痘関連資料の収集

南開大学八里台キャンパス内の図書館及びデジタル書庫、天津市立図書館、山東省の曲阜市立図書館所蔵の、学術雑誌や地方風俗誌、電子古籍を通覧し、天然痘に関連する事例報告や、医学書などを収集した。また、中国学位論文全文データベースや中国優秀博修士学位論文庫、国家科技学位文献中心文学位論文庫を利用して、中国国内の学位論文や調査報告書を通覧し、天然痘をめぐる習俗に関する先行研究を収集した。

さらに、収集した資料をもとに、中国における天然痘習俗の研究状況を整理した。その結果、中国には、種痘の導入と普及をめぐる論稿が多数存在する一方で、天然痘をめぐる習俗に関する論稿が少なく、その中でも、実地調査に基づいた比較的最近の報告と

して、孔文麗による〈撒饅饅一种民间育儿祛病习俗的研究〉(2017)が存在することが分かった。孔文麗は平成27年から平成29年にかけて、山東省曲阜市陵城鎮陵南村において計7日間、聞き書き調査を行っており、25歳から93歳の村落神職人員、村委會会計、郷村医師、鎮防疫工作人員、鎮中心幼稚園教師、普通村民への聞き書きを約6万字収集している。しかし、陵南村における習俗の変遷についての分析がされていないなど、調査報告としては不十分な点も見られ、検討の余地があると言える。

また、報告者は、地方風俗誌や調査報告書から、黒竜江省から福建省にかけての天然痘をめぐる事例を25例収集した。その結果、中国各地に、家の中に祭壇を設けて天然痘の神を祀る、あるいは天然痘の神が祀られる廟へ行き香を焚いて拝み、“鼓蓋”、“焼餅”、“饅首”、“饅頭”、“餠餠”、“饅饅”と呼ばれる小麦を材料とする蒸したパンを供える事例や、天然痘の神の名前を書いた牌位や天然痘の神像を焼き捨てる事例、種痘を接種した小児の家族と親族、隣人の間で“鼓蓋”、“焼餅”、“饅首”、“饅頭”、“餠餠”、“饅饅”が贈答される事例などが存在することが分かった。

(2) 天然痘をめぐる民俗の現地調査

報告者は、留学期間を利用して、平成29年10月に天津市薊州区東院天仙宮内の天花娘娘の調査、平成30年3月3日に天津市津南区葛沽鎮安正道において葛沽宝輦花会の調査、平成30年5月26日に山東省曲阜市陵城鎮陵南村で天然痘をめぐる歳時習俗の調査、平成30年7月12日～7月13日に山東省曲阜市陵城鎮陵南村で再度天然痘をめぐる歳時習俗の調査を行い、天津市内と山東省曲阜市内で計4回の現地調査を行った。このうち、平成30年3月3日に天津市津南区葛沽鎮安正道で行った調査と、平成30年7月12日～7月13日に山東省曲阜市陵城鎮陵南村で行った調査について、具体的な内容を記述する。

①平成30年3月3日天津市津南区葛沽鎮安正道

天津市津南区葛沽鎮安正道では、毎年旧暦正月16日の9:30～16:00に、葛沽宝輦花会が行われる。この祭祀では、“痘疹娘娘”と呼ばれる天然痘の神の“宝輦”と呼ばれる神輿が“香斗茶棚会”という団体によって担がれる。筆者は香斗茶棚会の宝輦の担ぎ手で、次期香斗茶棚会の会頭となる予定の話者(生年1993年)に、聞き書きを行い、香斗茶棚会の構成やその役割について調査した。また、平成30年3月3日に行われた葛沽宝輦花会における、各茶棚会の動きを観察し、映像と写真により記録した。

②平成30年7月12日、7月13日山東省曲阜市陵城鎮陵南村

報告者は、平成30年5月26日の予備調査を経て、平成30年7月12日、7月13日に再度山東省曲阜市陵城鎮陵南村を訪れ、陵南村在住の1950年～1990年生まれの漢族の話者計6名から聞き書き調査を行った。陵南村には、旧暦4月から旧暦6月1日にかけて、“種

花花”、“掉疙疸”、“掛紅子”、“撒饊饊”、“頂紅子”、“焚紅子”と呼ばれる天然痘をめぐる歳時習俗が存在する。今回の調査では、実際に平成30年7月13日（旧暦6月1日）に行われた、“掛紅子”、“撒饊饊”、“頂紅子”、“焚紅子”の観察と、映像と写真により記録した。

(3) 論文執筆

帰国後、先行研究の整理と、山東省曲阜市陵城鎮陵南村における実地調査の結果をもとに、『東アジア文化研究』第4号（平成31年）掲載予定の「天然痘の歳時習俗—山東省曲阜市陵城鎮陵南村の場合—」を執筆した。